

近年、地球温暖化のことが大変話題になっている。私共日本ルツボは、黒鉛増埒やレンガを焼成する時に、またお客様が私共の製品を使う時にも多くのエネルギーを使用しているだけに、温室効果ガスの排出について、無関心ではいられない。

「温室効果ガス」は、新聞・雑誌で見ない日が無い程よく使われている言葉であるが、私はこの中の「効果」という使い方に常々疑問を抱いている。広辞苑を見ると「効果」とは、「ある行為によって得られた一期待通りの良い結果」とある。地球を温暖化させるという意味では、CO<sub>2</sub>ガスなどは確かに効果的であると言えるのかも知れないが、地球環境からすれば決して良いことではなく、環境を悪化させているのである。「温室悪化ガス」という表現は出来ないまでも、一般市民に誤解を招くようなことを止め、単に「温暖化ガス」という表現に変えた方が良いのではないかと考えている。英語では「グリーンハウスガス (GHG)」と表現しており、日本語の「効果」を意味するようなニュアンスはない。先ず私は「温室効果ガス」の表現を止めて、「温暖化ガス」とすべきだと訴えて行きたい。

さて、京都議定書では1990年の温暖化ガスの総排出量に対して2012年までに6%削減とあるが、私は本当に実現可能なのかと大きな疑問を持っている。我々は、すでに長い間文化的な生活を享受してしまっているし、また常に経済的成長を願っているわけなので、排出を総量で少なくすることは大変困難なことであると思う。むしろ1990年から現在までに6~7%増えているものと理解している。仮に6%とすると、これから2012年までに12%も減らさなければならないわけだから、私はとても無理だろうと思う。経済諸団体や各国政府は、世界のあちこちで会合を持ち、温暖化防止の対策を協議している。ただ心配なことは、実行を伴わないかけ声だけに終わってしまうので

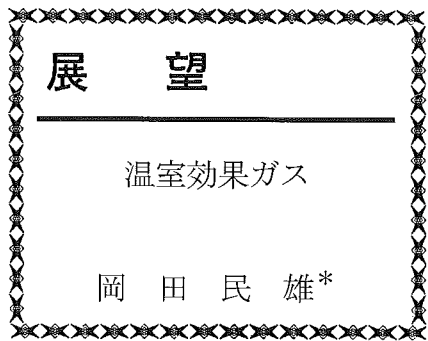
はないか、また一方では排出権取引のような商売やどこの国が主導権を取るかと言うような外交の道具として利用される可能性もあることだ。しかし、商売に関しては、日本の優れた省エネ技術の装置・器機やそれに付随したソフトを販売し使用されるのであれば、温暖化ガスは、実際に地球上から削減されるのであるから大いに商売をすべきであると考えている。私は、日本にとっては世界に向かって大きなビジネスチャンスがあると思っている。

戦時中に誰一人「日本は負ける」とは言えなかった。今は、「これは達成出来なからう」と言っても憲兵に捕まる事はないが、やはり言い難い事である。然し乍ら現実の問題は、これから益々中国・インドをはじめとする新興国が、大きな経済成長を持続するであろう。大気は決して日本やヨーロッパのものではない。地球全体のものであり、米・中・印などにも呼びかけて、これらの排出大国に温暖化防止の技術開発意識を持って貰うことが非常に大切な事であるとは思っている。しかし敢えて言わせていただきたい、「達成できなかった時のことを考え、対策を真剣に討議すべきだ」と。

達成不可能を思っている私でも、温暖化ガスの削減には全人類は最大の努力をすべきであると考えている。

そのためには先ず、それぞれの国民にとり身近な日常生活で困るのだと言うことをもっとアピールすべきである。日本の場合、南極の氷が崩れる様子や南の島の水位が上がっているのを映像等で見ている位で、国民一人一人はあまり危機感を持っていないように思える。

2007年11月に、私は経済同友会のミッションに同行し、オーストラリアで開催された温暖化防止のための国際会議に出席する好機を得た。オーストラリアでは極端な干ばつにより水不足、山火事、家畜の死、農作物の不作…など市民の日常生活に直接の影響が出ており、人々は温暖化に対し



\* 日本ルツボ(株)代表取締役会長 T. Okada

非常に問題意識を持っているように感じた。

二番目に排出量の規制は総量規制から原単位方式にすべきだと思っている。総量のコントロールは経済成長のことなど考えると非常に難しく、矛盾点も大変に多いが、原単位方式とすれば、各企業、業界、国も努力のやり甲斐があると思う。例えば、1990年にある製鉄会社の生産量とそれに使用したエネルギーの記録で原単位は分かる。それと2012年の原単位を比較し6%が達成できているかどうかを調べることは容易だと思う。これを総量で見ると、企業努力で原単位を半分にしても生産量が倍になっていたらイーブンになってしまう。これでは経済活動を止めてしまうことになるが、原単位方式では企業のコストダウンと温暖化ガスの削減・抑制との利害が一致し、企業にとり大いにやり甲斐があり、技術開発にも積極的に取り組める。

三番目に「放熱利用」の提案である。

「省エネ」と「放熱利用」の違いは、省エネとは製品を生産するのに必要なエネルギーをどこまで省くことができるかであり、放熱とは溶解や焼成の過程で得た熱を大気中に放出することと私は理解している。例えば鉄を溶かすためのエネルギーをどれだけ少なくできるか、これが「省エネ」であり、固まって真っ赤な状態になった鉄が常温に冷えるまで出す熱を「放熱」と思っている。エネルギーを使って生産している多くの会社で、放熱はあまり利用されていないように思える。アルミインゴット、鋳物、耐火レンガ、ガラス、セメ

ント…これらの産業からの放熱を回収できたら省エネ換算すると非常に大きなものになり、温暖化防止の一助になることだろう。

四番目に「海洋植物の育成」を提案したい。

温暖化ガスの削減・抑制が難しいと私は思っているので、排出された温暖化ガスをどう減らすかを考えるべきだと思う。それには植物の光合成による炭素同化作用以外、現時点では考えられない。一般には植林し、森林を増やすこととは思うが、敢えてこのような提言をしたい。昆布やわかめのような海洋植物を大量に育成すれば、光合成によりCO<sub>2</sub>を減少できるであろう。日本は海に囲まれた国である。昆布は北海道や東北地区に限られた場所で育成しているようだが、品種改良により日本中の海で育つようにすれば、食糧としてだけでなく、乾燥し燃料に、建材等の素形材などにと、日本の資源として、大いに役立つのではないか。日本の大企業は臨海にありそこから廃出されるCO<sub>2</sub>をナノバブル化技術を応用すれば、CO<sub>2</sub>ガスは海中に浮遊させておくことが可能であり、海洋植物の光合成も容易になる。日本は耕地も狭く、農業用水にも限界がある。そのような状況の中で、トウモロコシや大豆など利用するバイオエナジーなどは、人間にとりエネルギーより食物の方がより重要であるのだから、考えない方が良いと思う。

私はたとえ小さなことでしかなくても温暖化防止に役立つような炉や耐火物を開発していきたいと考えている。